

28 MAR 2002



第16号

日米エアフォース友好協会

だより

Japan America AF Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会

〒105-0004 港区新橋5-25-1-3

編集：J A A G A 事務局

印刷：財団法人 防衛弘済会

J A A G A 講演会

# 激動する国際情勢と 航空自衛隊の活動について

—— 空幕防衛部長の講演を熱心に聴講 ——

平成14年2月8日(金)、GH市ヶ谷においてJ A A G A 講演会を開催した。今回は、講師に航空幕僚監部防衛部長 永岩俊道空将補をお招きし、「激動する国際情勢と航空自衛隊の活動について」という演題で、約1時間にわたりお話を頂いた。講演会には約130名が参加し、熱心に聴講した。なお、講演会に引続き懇親会が行われ、航空自衛隊の現況や将来などについてオフレコを含めた話に花が咲いた。講演要旨は次のとおり。

航空幕僚監部 防衛部長

空将補 永岩俊道

## ＜講演要旨＞

過去1年位を振り返ってみて非常にインパクトの高い事象が発生したので、それに関連して如何なる形で我が航空自衛隊が行動したか、今後どういったベクトルで検討していけばよいか等について

考えていることを紹介してご指導いただきたい。

### ○ 現中期防策定時の認識(多様化する任務への対応)

現中期防策定時に航空自衛隊が考えていた将来の情勢・環境認識をもとに、空自に期待される任務の範囲、我が国の空の守りを万全とすべく体制を築くことを原則としつつ、脅威対象が非常に広がるという認識から、ミサイル防衛、NBC対処、ゲリコ

マ対処、災害派遣とスパンの広いニーズに対応すべき体制を創りあげなければならないと考えていた。

ただし、広いニーズに関連する役割については、確信的なものではなかった。

### ○ 多様化する非対象脅威

昨年の9月11日で、厳しい21世紀の幕開けが始まったという認識をするべきであると考えている。日常生活において国民に不安を与えてしまったのが本事件であり、テロに関連する対応も準備しなければならず、また、常時継続的に態勢を整えておく必要もあり、平時・有事の境目がなくなってきつつあると認識。

脅威という観点では、空を経てくる航空機だけが脅威ではなく、将来について化学兵器、核も場合によっては使う環境になる恐れがあり、脅威自身の多角化に強い問題認識を持っている。



Maj. Gen Nagaiwa

周知のとおり米国は国防予算を大幅に上げることを決心し、ホームグラウンド・ディフェンスから、諸々のテロを含む事態に対して毅然と対応しようとしている。

空自も幅広い脅威に対応できる体制を整えて、我が国の平和と安全、国民の財産を守るといった観点で役割を果たす方向は何なのかというのを模索している段階。

○ 新たな脅威認識

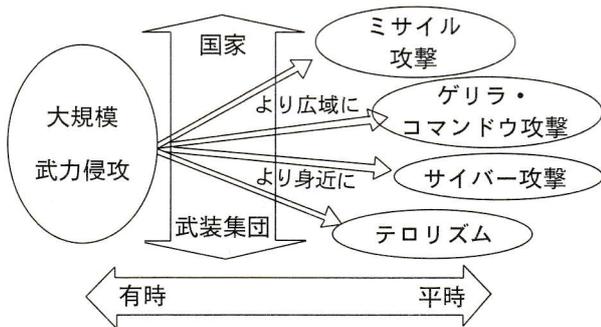
米国は、以前からテロをLIC (Low Intensity Conflict) と位置付け、高い関心を持っていたにもかかわらず、9月11日の事象については防護できなかったことを強く反省。そのため、テロ行為はひとつの戦争の形態という位置付けで万全の態勢をリードしつつあると認識。

○ 多様化する脅威

現在の情勢・脅威認識は現中期防策定時と同じであり、それをより具体的に分析して将来の対応を準備しなければならない。つまり、大規模侵攻・武力侵攻のみならず、平時から有事、ミサイルから日頃のサイバーに関連するところまでを含めてより広範囲にわたる脅威に如何に対応するかということを考えている。

防衛庁の中でも、将来についての在り方検討というものが開始されているが、9月11日の事象は重く押し掛かっている課題であると認識。

多様化する脅威



○ 米国テロを契機とした態勢整備

自衛隊の行動に関する法整備にあたってのスタンスは、米軍の行動・活動を支援するという位置付け

ではなく、総理の当初の方針演説であったとおり、我が国自身の問題・課題という認識でその対応を考えた。

空自については何が行動できるのかという機能からアプローチを行い準備。結論的には、テロ対策特措法、自衛隊法の一部改正という形で警護出動、施設警護が可能となった。

○ テロ対策特措法に基づく活動

空自の持っている機能を有効に活用するということで役割を果たすという考え方から、輸送機を有効に活用することで米軍とともに行動することとなった。

政府レベルでの調整が11月初旬にキックオフされ、11月20日に特措法が成立、実際に空自が航空機を飛ばしたのが11月末日という流れ。

○ 自衛隊法の一部改正

基地の機能の維持は、空自が国民のために活動をなす上での基盤を防護することであり、非常に大事なことであると認識。これまでは、武器を防護するという位置付けでしか武器の使用ができない状況。

この隊法に係る態勢についても、特措法の議論と並行して積極的に議論し、結果として自衛隊法の一部改正がなされた。具体的には、警護出動が81条の2及び91条の2で、自衛隊の施設の警備が95条の2で、領域警備が79条の2及び91条の2でそれぞれ規定。

法的枠組みは整備されたが、具体的な態勢については、課題が多くあり、それを今急速に検討している。例えば、武器使用に係る基準は部隊の指揮を執る上で必要であり、また、国の意志としてどこまで実施させるという枠組みについても現在検討中。

○ PKO法の一部改正法

PKO法の一部改正については、まだ多く課題が残っているものの、現在のところはPKOに係る本隊業務の凍結解除ということで枠組みが拡大。

武器の使用に関しては、「職務を行うに伴い自己の管理の下に入った者」の安全を確保する上で武器を使用することが可能となった。

○ UNHCRの要請に基づく避難民救援

アフガンの方面が微妙になった時期に空自に来た

任務がU N H C Rの要請に基づく避難民の支援（現地に対する所要の支援物資の輸送）であり、C-130の航続距離、搭載量の限定から、軍の輸送機を使う位置付けについて色々な議論があった。

結果的には、本任務を行った現地の部隊あるいは日本の国に対して高い評価を得ている。

本任務は、P K Oの枠組みで行うため、紛争当事国でない、安全な地域に航空機を飛ばすことになり、最終的にイスラマバードに運ぶことに決定。

アフガニスタンで作戦が始まった場合、紛争当事国か否かの見極めが非常に微妙な段階であり、その位置付けについて懸念はあったものの、空自としてはまずはインド・デリーまで展開させることで10月6日に小牧基地を出発。ウタパオを8日に出発させる際に作戦が発起。このためGo、No-Goの決心のための情報を現地から得、この状況であればイスラマバードであれば大丈夫であると判断し任務を継続させた。

この際、デリーからイスラマバードの直行経路飛行が許可された。本航路は民航機も飛行しておらず、カラチ経由のルートでしかオープンされておらず、日本とインド、日本とパキスタンのいい過去の関係と現地のアタッチェとか大使等いろいろな方が調整に御尽力いただいたがゆえ可能となったものと認識。しかも、両国は空自機の管理・モニターをしてくれ、空自の6機は整齊と任務を遂行することができた。

#### ○ 空自の対米支援（空自が米空軍と共に実施する作戦）

空自の対米支援は、基本計画に書かれているとおり、インド洋から東はグアムの範囲までの輸送任務。

空自の役割について米軍とユニホームとして話をしたのは、我々としても最大限努力するが基本的には空自もパイロットの養成、国内の輸送支援等を恒常的に実施しつつあるということで、最大6機ということで調整。

#### ○ 対米支援の概要

現在までに、国内、国外の輸送任務で25回、合わせて300トンを超える荷物、71名の人員を輸送しており、引き続き所要があるということで継続し

ていく予定。

#### ○ 冷戦後の大規模な航空作戦

人類の空への歴史が1903年のライト兄弟の初飛行からとすると、この約100年のうちに人間の歴史の中でエアパワーの役割の拡大が極めて顕著であり、加えて冷戦以降、更に顕著な使われ方をするようになったと認識。

#### ○ 米軍の航空作戦の特徴

使用している精密誘導兵器、無人機、戦闘機等、色々な新しい技術力を適用した兵器が活用されているが、忘れてならないのが攻撃に係るミッションとその支援ミッションの比率で、その割合というのは最近の戦争になるに従い支援ミッションのソーティ数が非常に多くなっている。

米軍は、輸送、後方に係る役割が極めて大事であることを過去から学んでおり、輸送任務自体も前線で戦っている作戦と同じ位置付けにあると考えている。

#### ○ 精密誘導兵器の投入量の変遷

ベトナム戦争あたりから比較して最近のもろもろの作戦は、GPS等も使って精密誘導兵器の投入は60%以上になっている。

#### ○ 広範なテロリズムへの対応

空自の課題ということで、当初説明したとおり、対応すべき脅威のスペンが非常に広がっており、テロへの対応を含め、基地機能を維持するといった観点の基地防衛上の課題を、できるだけ早急に解決していく必要がある。

それは法制整備、装備関連、具体的な手順、人的戦力・訓練の在り方も関連することであるため、空自をあげて検討中。

#### ○ 空中給油・輸送機

空中給油・輸送機について14年度予算で査定をうけた。

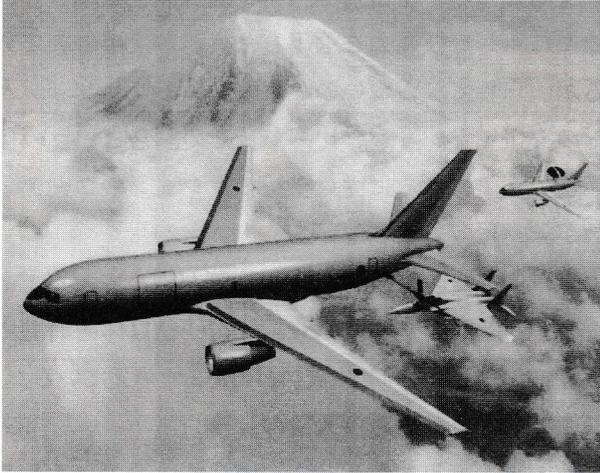
空中給油機能については、空自における欠落機能の1つと認識し、昭和62年度の中期防以降、3箇中期以上をかけて要望しており、ようやく整備できることとなった。

ただし、「空中における航空機に対する給油機能及び国際協力活動にも利用できる輸送機能を有する

航空機」ということで、当時の「空中給油機」とは名称を異にしている。

3,500 マイル程の航続距離を持つ輸送機であるので、燃料を積まない上半分のスペースの有効活用を図るということで、一昨年の暮れにこのような形となった。

本機は5年国債で、毎年1機ずつ本中期において4機を整備する計画である。



An image of JASDF Tanker

#### ○ 警戒管制機能の向上

14年度予算でバッジシステムに係る関連の整備が認められた。本事業も空中給油・輸送機と同じような期間を要する。

本システムは、防空のシステムであるが、多様化する空自に対するニーズに柔軟に対応するとともに、近年特に技術進歩が著しい情報通信分野の先端技術を取り入れるために、可能な限り拡張性を確保したシステムに育てあげることが課題であると認識している。このため、現在の中央一括処理方式を、最新の情報処理技術を活用したネットワーク分散処理方式に変えていく形で模索している。

#### ○ 情報通信技術の積極的な活用

もろもろのITの風が吹き荒れており、DII等ネットワーク以外への活用ということで、限られた空自の戦力を活用する上での工夫が必要であると認識。

#### ○ 日米関係の重視

日米関係の在り方については、色々なレベルでの

防衛交流をはじめ様々な活動をしている。最近ではコープノースグアム、あるいはコープサンダー等の共同訓練を実施している。

#### ○ 日米関係の充実

日米関係は、地域の安定化のためにタイアップを図っていかなければならないと考えている。

当事者同士の話し合いでは、あるべき論で話を進めるため、厳しい状況になることは考え難いが、体制を維持するといった後方に係る観点では、今後厳しい闘いを米国としなければならないのではないかと考えている。装備品におけるインタオペラビリティを確保するため、色々なトライをしているところであるが、全てがうまくいくわけではなく、色々な課題を抱えている。例えば、空自が、取得を決心した途端に部品枯渇が既に始まっている類、空自の装備品の能力向上を模索している諸々のアイテムが生産を終えていることなどを念頭に調達をしなければならぬ。

#### ○ 装備品の対米調達

航空機関連調達に係る国内外別支払割合の推移を見ると、前々々中期防で国内支払率68%、対米支払率32%、前々中期防で国内支払率59%、対米支払率41%、前中期防で国内支払率57%、対米支払率43%と対米支払割合・依存度が増大しており、今中期防においてもっと増えるものと見ている。相当深刻なことであり、このことを念頭に置きつつ、お互いの装備品の在り方について考えていかなければならないと考えている。

色々課題はあるものの、日米関係は最終的には結局は人と人が築き上げるものであるから、いろんなレベルでその信頼性を確認し合うことが非常に大事なことでありと認識。

実際、今回C-130とU-4を使った形で支援しているが、現場レベルで非常にいいミッションができておりと米軍側から伝え聞いている。日本の隊員はまじめで、士気が高く、時間も極めて正確に仕事をするので、米軍の軍人のレッスンになっているという評価も受けており、非常に嬉しく思っている。

## 特別寄稿

## J A A G A の皆様に

第5空軍司令官 トーマス C. ワスコウ  
空 軍 中 将



Lt. Gen. Waskow

古巣に戻ってこれることができてうれしく思っています。在日米軍及び第五空軍司令官として日本に帰ってきてから沢山の日本の友人たちから連絡があり、シーラも私も大変うれしく思っています。

9年間のブランクがありましたが、航空自衛隊の方々との公私にわたる友情は更に強くなりました。

個人のレベルでの友情と公の立場に対する尊敬の念が成功の基礎となる国に対し、親しみのある心地よい立場に帰ってきたと感じています。

私の家族と日本の関係は1923年に始まりました。その年の9月に起きた関東大震災の被災者への救援物資を運ぶ派遣団団長が私の祖父であるパーシー・ポー・ビショップ大佐でした。

1952年には在日アメリカ大使館勤務となった父に伴い家族で日本にきました。朝鮮戦争の間は代々木にあった小さな日本の家に住んでいました。

私と弟は同年代の日本の子供たちとよく野球をしました。その環境では野球が私たちの共通語であり、空き地が世界でした。

1989年には空軍大佐として沖縄の第18戦術戦闘航空団司令として赴任し、1990年から1992年は第五空軍の作戦部長でした。

日本から数年離れていましたが、米軍と自衛隊の関係が着実に深まっていくのを見ていました。

1999年には画期的な新ガイドライン関連法が成立しました。この関連法はそれまでの日米同盟関係の主流であった日本の防衛から、日本の安全に影響

を及ぼす可能性のある周辺の事態にその主眼を向けるきっかけとなりました。

新ガイドライン関連法成立後、共同計画や共同訓練等の機会を着実に増やし、東アジアの安全への脅威に対する即応力を高めました。

2001年11月29日、航空自衛隊は日米共同関係への新しい、そして目に見える支援を始めましてくださいました。その日、「不朽の自由」作戦支援のため自衛隊のC130が貨物を載せた最初の任務を飛行しました。2002年3月1日現在、航空自衛隊は90ソーティーで400トン以上の貨物を運び、米空軍をその任務から解放してくれました。

日本の貢献は、世界のテロリズムとの戦いにおける最高の共同運用として歴史上に残るでしょう。貴国のテロリストの脅威への対応は、両国の同盟の強さと太平洋地域における日本の不可欠な役割を示しました。

アメリカと日本の強い関係は簡単に説明することができます。それは、私が安全と安定に対する同じ価値観を持っているからです。両国の民主主義へのコミットメントがアジア及び世界中の平和と繁栄のために共に行動することにつながります。

2001年9月11日に世界は根本的に変わりました。その日、テロリストたちは世界を新しい時代に無理やり引き込みました。あの攻撃は特定の地域または国に対するものではなく、暗殺者と犯罪者による文明人への攻撃でした。その結果、世界の文明国はテロリズムとの戦いを始めたのです。

私たちに与えられた任務は大変ですが、必ずやり遂げます。

テロリズムとの戦いについて三点述べたいと思います。

- 1) 成功は何日、何週間という単位ではなく、何ヶ月、何年という単位で計られる。テロリストを探し出し、排除していくことは大変難しく時間のかかることです。私たちの目的はアジア太平洋地域においてテロリストを確認し、その支援団体を根絶することです。勝利へのカギは同地域内で脅威に対する同じ考えをもった国同士が強固な協力体制を持続していくことです。
- 2) 最終的な成功はファンファーレを鳴らさずにもたらされる。公式な平和条約が締結されるでもなく、勝利のパレードをするでもないでしょう。しかし、その成功は私たち家族の平和のためであり、私たちの社会生活の安全を確保するためのものです。我々は現在、領域の無いテロリストのネットワークと戦っています。テレビで勝利している場面を見ることができそうですが、しかし見ることのできない勝利も沢山あるでしょう。スペシャル・オペレーションはこの戦いにおいて大部分を占めます。
- 3) この戦いは連合軍の連合によって戦われる。各国はそれぞれ違った任務と貢献と行います。ある国は物資面での支援になるでしょうし、またある国は資金面や軍事面での支援をされるでしょう。我々の仕事は「ニュー・ノーマル(新しい常態)」の定義づけをすることです。一緒にどのように運用を展開し、又どのように毎日の社会生活を送るかです。このことにより、我々にとって大事だった沢山のことを今後も継続していけるのです。オリンピックやワールドカップのような競技大会も開催します。今まで通りこれらのことをしますが、これからは知

恵を働かせてやっていきます。

これまでの生活に戻り通常の社会生活を営みますが、決意も継続します。

日本はこれらの新しい任務を透明性を持って遂行し、その目的と制限に関し近隣諸国が理會できるようにしています。アメリカと我々と同盟国にとって最も重要なことはこれらのイニシアチブが米軍への全面的支援に基づくものだという事です。

「不朽の自由」作戦への支援は航空自衛隊のC130輸送支援だけでなく、陸上自衛隊では将来における共同運用の基礎を築きました。更に、海上自衛隊の艦艇による連合艦船への燃料提供と北アラビア海における監視活動の支援もあります。

この協調関係は周辺地域にとって大変重要です。

日本の防衛という我々の第一の任務を遂行しながら今後も相互運用性の強化に力を入れていかねばなりません。地域の平和と安定に寄与していく上で、日米同盟関係の代わりとなるものではありません。

我々は日本の皆様と航空自衛隊との強い絆を誇りに思い、日本が米空軍と共に行動していく決意を歓迎します。

50年以上に亘る両国の友情と同盟は、今が一番強固であり、将来起こりうる様々な事態に自信を持って共同で向かっていけると信じています。

世界の状況が変わったにもかかわらず、友情がまったく変わっていないこの古巣に戻ってくることができて本当にうれしく思います。両国の間にある相互理解と友情は非常に強く「ニュー・ノーマル」の世界になってもそれは変わることがないでしょう。

### Proposed JAAGA Article for Lt Gen Waskow Fifth Air Force Commander

It's good to be back in my old neighborhood. Sheila and I are thrilled with the response we've received from our Japanese friends since returning to Japan as the commander of United States Forces, Japan and Fifth Air Force. After an absence of nine years, our friendships with our Japan Air Self-Defense Force offices and family members have gotten stronger.

In a country where personal relationships and professional respect are the foundation of success, we feel as though we have returned to a familiar and comfortable setting.

My family's relationship with Japan began in 1922 when my grandfather, Colonel Percy Poe Bishop, headed a US delegation providing humanitarian relief in response

to the tragic earthquake that struck northeastern Japan in March of that year.

Then in 1952, my brother and I accompanied our parents to Tokyo where our father was assigned to the US embassy. During the Korean War we lived in a small Japanese house in the Yoyogi district of Tokyo.

It was there my brother and I spent afternoons playing baseball with Japanese boys our age. In that environment, the game of baseball was our common language and the playing field was our world.

In 1989, as a US Air Force Colonel, I was assigned to Okinawa as the 18<sup>th</sup> Tactical Fighter Wing Vice Commander and from 1990–92 the Director of Operations at Headquarters Fifth Air Force.

Although I have been away from Japan for a few years, I have observed a steady positive trend in the aspects of our military relationship.

In 1999 the Japanese Diet passed the revolutionary legislation for the Defense Guidelines. This landmark amendment has widened the focus of our alliance from the traditional defense of Japan to concerns with regional developments that affect Japanese security.

Since the Defense Guidelines were passed we have steadily increased our combined planning and exercising—improving our capability to deal with threats to the security in East Asia.

On November 29, 2001 the Japan Air Self-Defense Force began a new and more visible chapter in support of the US bilateral relationship. On that date, a JASDF C-130 flew its first mission, carrying cargo, in support of Operation Enduring Freedom. As of March 1, 2002, the JASDF has flown more than 90 sorties, carrying 400-plus tons of cargo thus relieving the USAF from that mission.

History will rate the Japanese contribution to the war on global terrorism as one of the great bilateral success stories of our times. Your response to the terrorist threat has demonstrated the strength of our alliance and the indispensable role of Japan in the Pacific region.

The reason for this strong relationship between the US and Japan is easy to summarize. We share commitments to the same values, to security, and to stability. Our common commitment to democracy has helped us work together for peace and prosperity in Asia and throughout the world.

The world fundamentally changed September 11, 2001. On that date terrorist, brutally ushered in a new era—it was not an attack of a single religion against a single country; it was an attack of assassins and criminals against civilized people. As a result of that attack, civilized nations have begun a determined campaign in a war against terrorism.

Our task is challenging, but we will prevail.

I offer three observations about our war against terrorism:

- 1) *Success will be measured in months and years not days and weeks.* There are difficulties associated with finding and eliminating terrorist cells—that will take time. Our objective is to identify and root out terrorists and their support in the Asia-Pacific region. The key to victory is a sustained, unprecedented, cooperative effort among like-minded countries in the region against the common threat;
- 2) *Final success will be achieved without fanfare.* There may not be formal peace treaties signed; no victory parades but the measure of success will be peace for our families, and security for our way of life. We are at war against a network of terrorists

that extends beyond boundaries. Many of our victories will be displayed on TV; but many will not. Special operations will be a major portion of our campaign against terror; and

3) *The war will be fought by coalitions of coalitions.* Countries will have different roles and contribute in different ways. Some will provide diplomatic support, others financial and still others logistical or military support. In this war, the mission will define the coalition.

Our task is to define the new normal—how we will conduct operations and how we will live our daily lives—together. In doing so we will continue to do the things we cherish. We will continue to hold athletic events such as the Olympics and the World Cup. We will continue to socialize and participate in other activities we enjoy. We will continue to do all of these things, but we will do them smarter.

We'll go back to our lives and modify our routines, and that is good, but our resolve must continue.

Japan is undertaking these new missions in a transparent fashion, ensuring other countries in the region understand the objectives and the limitations. Most important for the US and our alliance, these initiatives have been undertaken in full cooperation with US forces.

Not only are JASDF C-130s continuing to fly airlift missions in support of committed US assets for Operations Enduring Freedom, Japanese Ground Self-Defense Force soldiers have laid the foundation for future joint augmentation operations. In addition, Japanese ships are providing fuel to coalition ships and assisting with area surveillance in the North Arabian Sea.

The Japan Self-Defense Forces are turning from the missions of the past to the missions of the future. This cooperation will continue to be vital for the region.

There is great potential for friendship and cooperation between our two great nations. We must continue to enhance our interoperability while maintaining the capabilities and readiness for the defense of Japan—our primary mission. When promoting regional peace and stability, there is simply no substitute for the US-Japan security alliance.

We are proud of our strong relations with the Japanese people, the JASDF and we welcome Japan's commitment to combined action with US air forces.

Our countries friendship and alliance of more than 50 years, is now stronger than ever, and will confidently handle the challenges of the future.

It truly is a wonderful experience to be back in our old neighborhood where in spite of the changes of our world our relationship has remained constant. The mutual respect and friendship between our two great nations is rock-solid and will not change in our "new normal" world.

## 講演等の要望を募ります

### 「安全保障に関する日米関係」等

防衛協力のための指針や物品役務相互提供などに関する論議がしばしば行われる昨今、事務局では日米関係の現状や展望に関するより良い理解の

ため、主として基地周辺の皆様を対象とする講演、懇談会等を企画できるよう準備しています。ご要望あれば御一報下さい。 J A A G A事務局

## 投 稿

# 米空軍特殊作戦軍司令官交代式への参列記

林 昭彦 (常務理事)

前在日米軍司令官ヘスター中將の米空軍特殊作戦軍 (AFSOC) 司令官への指揮官交代式に招待を頂き、同中將には三沢基地勤務以来懇意にして頂いたことへのお礼の気持ちで急遽お受けすることとし、この度参列の榮に浴して参りましたので、所感の一端をご報告致します。

同交代式は、1月16日、AFSOCの本拠地ハルバートフィールド (フロリダ州) において、伝統的な式次第に則り米空軍参謀総長ジャンパー大將によって厳肅かつスマートに執り行われ、指揮轉移の意義を改めて実感致しました。

AFSOCは、現在米国が行っている“Enduring Freedom”作戦の米空軍主役部隊であり、本式典で述べられた各スピーチの中で、現情勢下各部隊への期待と責任の大きさがアピールされ、そのためのそれぞれの決意の程が示されました。また、ジャンパー大將は式辞のなかで、ヘスター中將夫妻の日本での業績の大きさを称え、ヘスター中將も、スピーチで日本での職務が如何にやり甲斐があり充実したものであったかについての言及があったことを申し添えます。

また、その後のレセプションの席で米特殊作戦統合軍司令官ホーランド大將や、「砂漠の嵐」の立役者ホーナー大將 (退役)、あるいはAFA関係者との懇談の機会があり、航空自衛隊あるいはJAAGAとの今後の連携への期待等を伺って参りました。

私はヘスター中將が次期AFSOC司令官に決まり、その後同時多発テロの発生・対処作戦の実行へと推移していく中、本作戦の主実施部隊の指揮官の交代が作戦下に如何に行われるのかについて強い関心を有しておりましたが、今回それを目の当たりにし、彼等の対処法の一部を学んだ思いが致します。

その対処法は、①後任者の態勢の作為：ヘスター中將は離日後、C-130への転換操縦訓練を終えた



With Gen. Holland, Lt. Gan. & Mrs. Hester

後、アフガン・パキスタンを含む中東地域及び関係欧州地域を巡視し、隷下部隊の作戦態勢・作戦遂行状況等情勢把握を実地に行っています。彼のそこでの印象として、作戦下の兵士 (“Kids”) の目の輝きに彼等への強い信頼感を覚え、地上 (馬上) の各兵士がラップトップで空中のB-52等と直接連携を保持しながら行われている現場を見て、自己部隊の置かれている超近代的な作戦環境への認識を新たにたと述べていました。②作戦状況推移の判断と重複期間の伸縮：当初12月初旬と聞いていた交代時期を1月16日まで延ばしたのは、アフガンにおけるタリバン掃討の進捗状況の判断があるように思われます。等々、当たり前と言えば当たりの手法ですが、万全の手段を講じて指揮官交代を整齊と実施していることに精到な軍のあり方の一端を見た思いがしました。

また、米国内での民航機搭乗に際しての厳しい点検や空港での軍の兵士をも配しての物々しい警備態勢に比較して、作戦下のハルバートフィールドが極めて平静であったのも印象的であり、平時から作戦態勢にあるAFSOCの“Quiet Professionals”達の「静かなる凄まじさ」を感じた次第です。

最後に、式典への関係家族の参列が盛んであったことも印象的でした。これは、横田、三沢等での彼等の式典時にも感じたことでありますが、本国ではより盛んで「家族丸抱えて任務遂行」との印象を強くしました。因みにヘスター夫妻の家族・親戚はバス1台分40名が参列されており、皆さんが日本の

出来事や我々のこと等をよくご存知で、ここでも夫妻の日本への熱い思いが伝わる思いでした。

最後に、ヘスターご夫妻からの「日本の皆様にくれぐれもよろしく」とのメッセージをお伝えし報告と致します。

## … 新入会員の紹介 …

### 1 新入会員の紹介

#### (1) 正 会 員

氏 名 勤 務 先	〒	住 所	電 話 番 号
美濃谷一義 第一生命	189-0024	東村山市富士見町1-2-63-7-201	042-395-9512
	100-8411	千代田区有楽町1-13-1	03-5221-7693

#### (2) 個人賛助会員

氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
三室典子	162-0041	新宿区早稲田鶴巻町519マンション早稲田303	03-3207-7285

#### (3) 法人賛助会員

法 人 名 称 代 表 者	〒	住 所	電 話 番 号
アメリカンホームズ(株) 高田 紘一郎	207-0022	東京都大和市桜が丘2丁目247番地の13	042-564-5518

### 2 名簿修正等

#### (1) 名簿修正

##### ア 正会員住所変更

氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
佐貫由明	466-0834	名古屋市昭和区広小路町石坂28-1-M-802	

##### イ 個人賛助会員勤務先等変更

氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
工藤 健	144-0023	北区滝野川3-39-7クリニック滝野川副院長兼内科部長	03-3910-3438

##### ウ 法人賛助会員代表者変更

三菱プレジジョン(株) Mitsubishi Precision Co. Ltd.	山尾道弘 取締役電子システム営業本部長
--	---------------------

#### (2) その他

##### ア 訃 報

浦 茂 11月20日死亡

##### イ 退 会

- ・水野勝利、銭本信治
- ・(株)トキメック

# USAF & JASDFの相互交流を応援

航空自衛隊と米空軍とは、日米の相互理解と友好の絆を強化する一環として、幹部の相互派遣及びNCOの相互部隊研修を実施している。JAAGAは、これらの事業の円滑な推進及び継続に寄与し、また更なる充実発展を願って、物品の貸与や激励金などによりこれらの事業を応援している。

## 日米幹部の相互派遣

今年度は、米空軍側の飛行部門及び通信電子部門が交代となり、それぞれに新しい要員が着任した。飛行部門には、平成13年9月20日にF-15パイロットのルース大尉が新田原基地の飛行教育航空隊に、また通信電子部門には、平成13年10月22日にフェラー大尉が熊谷基地の第4術科学校に着任した。両大尉とも、嘉手納及び横田での日本勤務の経験があり、新しい任地での大いなる活躍が期待される。なお、現在活躍中の米空軍からの派遣幹部は、次表のとおり。

	部 門	部隊、基地等及び期間	階 級 ・ 氏 名
1	教 育	幹部学校（目黒） （13. 1. 5～15. 1）	中佐 ジェームズ V. アルダーマン LtCol James V. Alderman
2	飛 行	飛行教育航空隊（新田原） （13. 9. 20～15. 9）	大尉 アレン C. ルース Capt Allen C. Ruth
3	研究開発	飛行開発実験団（岐阜） （11. 9. 7～14. 9）	大尉 クリストファー T. オーエンス Capt Christopher T. Owens
4	整 備	第1術科学校（浜松） （12. 10. 2～15. 3）	大尉 デーヴィッド S. ロバートソン Capt David S. Robrtson
5	通信電子	第4術科学校（熊谷） （13. 10. 22～15. 10）	大尉 ジェフリー C. フェラー Capt Jeffrey C. Ferrer
6	要撃管制	第5術科学校（小牧）	欠：本年7月予定（語学勉強中）
7	航空輸送	第1輸送航空隊（小牧） （12. 11. 22～15. 11）	大尉 ディラン M. モナハン Capt Dylan M. Monaghan

## NCOの相互部隊研修

航空自衛隊から米空軍への第1回目の部隊研修が、平成13年9月3日から14日の間、嘉手納基地において行われ、空自隊員5名が参加した。終了間際の11日夜（日本時間）に発生した米国における同時多発テロにより最後のパーティは中止になったものの、その他の研修は予定どおり行われた。続いて2回目の研修が平成13年11月8日から28日の間、三沢基地において空自隊員6名が参加して行われ、更に3回目の研修が平成14年3月18日から28日の間、横田基地において空自隊員4名が参加して行われた。

一方、米空軍から航空自衛隊への部隊研修は、平成14年2月19日から3月1日の間、航空自衛隊千歳基地において行われ、米空軍隊員11名が参加した。

本年度は、同時多発テロの発生及びテロ掃討作戦実施中という厳しい状況下にもかかわらず、計画の一部変更はあったものの日米NCOの相互部隊研修が実行された。このことは、この事業を通じて相互理解を深めようという日米双方の強い意欲を感じさせるものであり、JAAGAとしても、引続き応援していきたい。

# 会 員 募 集

J A A G A は、創立 6 周年を迎え、更なる前進を目指して個人会員の会勢拡大に努めております。会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、個人会員につきましては、次のとおりです。推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接会員担当の係から連絡させていただきます。

【入会資格】 正 会 員 : 航空自衛隊のOB  
個人賛助会員 : 航空自衛隊のOB以外の方で、正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】

「郵便」 〒105-0004 東京都港区新橋 5 - 2 5 - 1 - 3  
日米エアフォース友好協会 会員担当行  
「電話」 0 3 - 3 2 1 9 - 5 6 3 8 細 稔 (株) 島津製作所  
0 3 - 3 4 8 9 - 1 1 2 0 尾 崎 利 夫 (東京航空計器(株))  
0 3 - 3 2 1 2 - 3 1 1 1 村 岡 亮 道 (三菱重工(株))  
0 3 - 3 4 3 1 - 4 8 2 0 宇都宮 靖 (横浜ゴム(株))

## ワンポイントQ&A

Q JAAGAとは?

A JAAGAは、航空自衛隊と米空軍との相互理解と友好親善の増進に資することを目的とし、現役の皆さんが仕事をやりやすい環境作りに寄与しようという航空自衛隊OB主体の組織です。

Q 協会の運営は?

A JAAGAは、ボランティアに徹し見返りを求めないこと、及び努めて現役の皆さんに負担を掛けないことを方針として運営しております。多くの皆様の期待に応えるべく、さまざまなアイデアを取り入れ、活動の幅を広げ、種々の事業を展開してまいります。

Q 私も参加できますか?

A JAAGAは、その活動をより活発にするため、個人会員の会勢拡充に努めております。航空自衛隊のOBの方は、どなたも正会員として入会できます。また航空自衛隊OB以外の方でも、個人賛助会員として入会の道があります。

## ☆ 原稿募集 ☆

皆様からのフリーな投稿や、JAAGAの活動に対するご意見やご要望を頂戴し

### 皆様と共に歩むJAAGA

として更なる発展を期していきたいと思ひます  
皆様の貴重なご意見や各種投稿をお待ちしています

#### 投稿受付

木村 忠信 Tel 03-3464-3053 (GEエジソン生命)  
Fax 03-5459-2236

